

「2023年度ベトナム国家大学ハノイ校スプリングスクール派遣参加報告書」

京都大学文学研究科博士後期課程1年 王 丹

今回のプログラムに参加した理由はベトナム語へ関心を持ったことである。ベトナムに行く前に、一年間ベトナム語の授業を履修した。その過程で、ベトナム語の文法現象に興味を持ち、今後の研究テーマの一つとして考察しようと考えた。今回のプログラムに参加した目的は、派遣を通じて、文化体験と共に、ベトナム語の能力を高め、調査を試みたいという点である。まず、ベトナムの文化については、日本とは遥かに異なるかもしれないが、中国とはわりと似ているところが多い。人と人の間の距離感が近く、知らない人でも話しやすい場合が多い。また、公園で知らない人に一緒に蹴鞠しようといわれたこともあって、とても楽しかった。生活について、道端にはみ出た喫茶店があちこちに見られる。コーヒーを飲んで一息ついてから一日を始める生活はベトナム人の極普通のライフスタイルとも言える。次に、語学能力を高めることについては、短時間で上達することは難しいが、私の発音がきれいだと何人かのベトナム語母語話者に褒められたこともあり、また店でベトナム語で注文してみると通じることが比較的多かったのでとても満喫した。最後に、調査については、充実して忙しい二週間だったため調査の話の切り出しにくかったが、事前に用意したアンケートを何人かのベトナム人学生に回答してもらうように頼んだところ、自分の思う通りにいいデータを収集することができた。

以上の目的以外に私が感じた点は、異文化や国際理解にはコミュニケーションが欠かせないという点である。ベトナムへの最初の印象はガソリンの匂いがする空気とクラクションなどで騒がしい交通で、不安と緊張の極みだった。しかし、このような不安は現地の学生とコミュニケーションしているうちにだんだん解消されていった。ベトナム人の学生はとても親切で、頑張って日本語で交流しようとしてくれ、私たちとコミュニケーションする意欲が非常に強かった。また、授業や課題などで忙しいのに、自分の時間を犠牲にし、私たちを観光地に案内してくれたり、美味しい料理屋さんに入れて行ってくれたり、こちらの要求に全て応えようとしてくれた学生たちには感謝してもきれない。短い間だったが、真摯で純真なベトナム人学生たちと深い友情を培った。異文化理解や国際理解の第一歩はその国の人とコミュニケーションをとることではないかと思う。また、私が感じたことのもう一点目は、体験の大切さである。中国人がどれほどベトナムのことをよく知らないかということは今回ベトナムに行ってはじめて分かった。戦争や歴史などの原因で、中国人とベトナム人はお互いに疎遠である。しかし、中国のマルチカルチャーや各種ドラマ、Tiktokなどはベトナムで相当流行っている。今回ベトナムに行くと、中国人だと知られた時に、学生たちから予想以上に歓迎された。また、少なくとも3人ぐらいのベトナム人は流暢な中国語で話してくれた。日本語学科なのに、あんなに上手に中国語もできるなんて、と私は本当に感心した。もし今回ベトナムに行かなければ、中国がどれほどベトナムの若者に好まれているのかも知るよしがなかった。したがって、体験そのものがまず一番大事だと実感した。

最後に、今回のプログラムを通じて私はたくさんのベトナム人の友人を作ることができた。今後もベトナム語の勉強と研究を続け、もし機会があれば、ベトナムでフィールドワークも行きたい。私自身はできる限り、中国、日本、ベトナムの間の架け橋になり、3カ国の教育界および社会で活躍して、3カ国の人々の相互理解と交流に尽力したいと思う。